

---

# 私の願いごと

hidaka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の願いごと

### 【Nコード】

N8237K

### 【作者名】

hidaka

### 【あらすじ】

僕は、普通の高校三年生。そのはずだった。だが、ふと気づけばいきなり摩訶不思議な『裏世界』という名の死後の世界にいた。そこで姿も見えない“存在”から『おまえは死んでいる』と言われ、僕の物語は始まった……（by 3度目の大改修m）——（m）

第1話（プロローグ） 終わりは突然（前書き）

自分の知らない世界、知らない状況、知らない他人に会った時、心  
にぐらっと動揺を感じる。

それを、戸惑いという。そこから何かしら生まれる。

## 第1話（プロローグ） 終わりは突然

いつからだろう。

遙か遠いところを、じっと見つめていた。

どう例えればよいか分からない。

強いて言えば、自分を乗せた何かが一気に深い谷底の下へ向かって落ちていくような感覚。

足元に漂っているのはえも言えぬ浮遊感。

冷静になってみると、こんな異常な感覚の中で何でさっきまで呆けていられたんだろう。

覚えていない。

気付いてからぞつとする。

改めて周りを見渡す。

いつか、どこかで見たことがあったような景色が広がっている。

確か……この景色は小学校に入学するもつと前、そう、ずっとずつと昔に一回見たような気がする。

あくまで、そんな気がする、ぐらいなものだけだ。

『この普通ではない状態から何とか抜け出そう』

頭では考えている。が、それが体の隅々まで命令として行き届いていない。

身体と心が真つ二つに分かれてしまっているような、変な感覚。

心は至って穏やかなのに、身体の方は極度の緊張状態。全然思ったように動けない。

けれど。実際のところ、自分の身体は表から見た限りではいつも通りだ。

身体と心。おかしくなったのはどっちだろう……？

いや、心の方だ。心が妙に『落ち着きすぎている』んだ。

そう意識した途端、胃の奥がだんだん気持ち悪くなってきたような。

急に居心地が悪くなってきた。

だからと言って何もやる気が起きないからおかしい。

逃げようか、ちょっと探検しようか、頭の中では考えているんだ。だけど、身体の方が脳の命令を全く受け付けてくれない。結局何もできない。

そこまで意識が回った時。突然まぶたが重くなってきた。

こんなところで寝るのは怖い。眠りたくない。

自分の部屋のベットで、あの柔らかい敷き布団と掛け布団に挟まれている感覚を味わいながら寝たいんだ。

……『眠たくなってきた』という気持ちをごれくらい維持していられたのかは分からない。

意識しないうちに静かなところに自分が引きずり込まれていく。身体全体がふわっと浮くような感覚を一瞬感じた。

移動した先は、一言で言えば『何も無い空間』を絵に描いたようなところ。

自分の周りに形が無く、色が無く、奥行きも感じない。この感じ。言葉に表しようが無い。

ふと耳を澄ませば、どこかから声が聞こえる気がする。

ぼーっとしている頭に鞭を打つと、やはり人間の声のようなものが微かに聞こえる。

そうしているうちに、周りの風景がぐにやりと歪んで今度は真っ暗になった。

さっきからの落ち着かない眼前の風景変化に耐えられなくて、胃の奥が思い出したかのように気持ち悪くなってきた。

そして。今僕がいるところは、白一点も無い、完全なる黒の空間だった。周りが何も見えないほど真っ暗だ。

「おい。そこにいるおまえ」

フツと自分の近くにいきなり人の気配が現れ、先程から呼びかけている声が急に大きくなった。姿は見えない。

「誰だ！」

いきなり声をかけられてかなり驚いたが、とりあえず返した。

「私はおまえのいた世界の事なら何だって知っているし、その世界で起こった出来事を変えることだってできる。そんな存在だ」

言われたその言葉の意味をすぐに飲み込めなかった。

「おまえは今、何かやり遺した事があるのだろうか？ だから今、私のいるところにおまえはいる」

その”存在”は、そんな事を突拍子もなく言った。

視線だけ、まるで僕を品定めでもしているかのような鋭い視線をどこか近くから感じる。

どうして視線や気配は感じるのに、姿が見えないのか。

怖くてまともな言葉を一言も返せなくなった。

とにかく、さっき『世界の事を何でも知っている』と言われた時

から、思考回路が停止していた。

一体何なんだ？ 誰だ。

黙っては何も進まない。自分の中の『恐怖』にかろうじて打ち勝って。

「あなたは誰だ？」

もう一度聞き返してみた。しかし、もう相手は一言も言葉を発しようとしなくなった。

沈黙が続いた。

この種の沈黙が苦手なので、とにかく何かを言おうとした。すると、無意識に一番気になることが真っ先に口から出ていた。

「あなたは本当に私のいる世界を変えることができるのか？」

この問いにはすぐ返事が返ってきた。

「無論、先ほどの言葉に嘘は無い。しかし条件があるのだ。その条件とは、誰かの為になり、その誰かが望む通りに世界を変えること」

「じゃあ、僕がその誰かになってもいいのか？」

「構わない。というか、むしろおまえが私を必要としていそうだから声をかけてやった。」

それに、もうおまえはもといた世界と違った世界に今はいる。自

「覚が無いのか？」

相手の意図が全く分からなかった。

『世界を変えたいか？変えたくないか？』

と問われれば、大抵の人、100人中90人ぐらいまでは『世界を変えたい』と答えるだろう。

それは当然のことだ。自分の周りの環境に100%満足している人は、こういうと失礼だが、なかなか特殊な人ではないだろうか？だから、『世界を変えられる人』は世の中の大抵の人に必要とされているはずである。

じゃあ、この存在は、世の中のほとんどの人に、こうやって声をかけているのだろうか？

それに、僕が今これまで生活していた世界と違う世界にいる、というのはどういう意味なんだ？

素直に疑問点をそっくり送り返す。  
すると、

「全然、今の自分の状況を分かっている様子がない様だな。一言で今のおまえの状況を説明しようとする、おまえ達の側から見れば、

『死んでいる』

としか言いようがない。

おまえは死んでいるんだよ。

それに、私はそんなに多くの人に声をかけている訳ではない。

私が声をかけるのは、生前の『世界』に未練を残して死んだ人間のうちで、私が目をつけた人物だけだ」



さらっと言われた。僕は死んでいる、と。  
お悔やみの言葉すらも無く。

……僕は死んでいるのか？ そんな馬鹿な。  
この妙な身体の感覚、今僕がいる変な『世界』は、死後の世界だ  
と言っのか！

何をすればいいのか分からなくなった。  
いや、冷静になることだ。いつものマイペースさが僕の持ち味だ。  
こんなのにあつという間に吞まれるなんて馬鹿もいいとこだ。  
そう自分に言い聞かせ。

「これは、悪夢だ。眼が覚めれば終わるんだ。  
きっと今頃、僕は布団の中で安らかに寝ているはず、だから……」  
言葉でその先が接げない弱みがあった。  
眼を開けようとしても、夢だと自分に繰り返し呟きながら教え込  
んでも、びくともこの世界は動かなかつた。  
……いや、それはそういうものなんだ。冷静になりなよ。  
自分自身に落ち着いて語りかけてみる。  
だけど。

今感じている自分の身体。その周りの空間。  
身体が小刻みに震えているのと、周りの空気が不気味なほどに止  
まっている感覚。

これが変にリアルなんだ。  
何というか、これまでに見てきた夢よりも、夢らしからぬほどに  
自分の周りの空気が正直なんだ。不審感が少なすぎる。  
勿論、それだけで信じようとは思わないが、あまりにも……

## 第2話：僕は死んでなんていない！（前書き）

お互いの意見が食い違う。お互いが自分こそは正しいと思っている。だから、議論はエンドレス。

その議論において、どちらかの意見が正しい事が『証明』できれば一応は解決するのだろうか？

しかし世の中、『証明』はそうたやすい事ではない。

そして、その果てにお互いに分かり合うことも……

## 第2話：僕は死んでなんていない！

どれくらい時間が過ぎたのだろう。

そもそもいきなり僕が死んでいる、なんて言うあの意味不明な奴が悪いんだ。

あんなこと言われて冷静になれるほど僕は老けてないし、悟ってもないのでね。

勢い、言い合いになってしまった訳で。

死んでいる、死んでいないの押し問答をあれから延々と叫び続けていた。

『おまえはどう考えても死んです！ 仕方ないんだよ。』

理由を説明できる方法があつたら教えて欲しいのはこっちの方だ。いい加減諦めろ！』

真つ暗な、文字通り一寸先も見えないこの空間でそいつの甲高い声が響く。

ひたすら僕への説得を試み続けているらしい。

『そんなの信じない。』

どうして僕がある日突然気が付いたら急にあの世に逝ってないければならないんだ。

『冗談じゃないんだよ！』

そんなたちの悪いジョーク、今は変にリアルすぎてウケないんだよ！

そこまで言うんならはっきりと証明してくれ。僕の目の前で、僕が死んでいるという事を！』

死んでいるはずが無い。  
やっぱりそんな突拍子の無い事、信じると言われて信じる方がど  
うかしてる。

『そんなに簡単に証明できるんなら私だって何の苦労もないんだよ  
！  
じゃあ言うが、おまえこそ、今確かに自分は生きていると証明で  
きるのか？』

どう返せばいいか分からなくなる。  
確かにそうだ…… ずっと感じている、身体からの違和感。  
しかし、ここで弱腰になったら相手の思う壺だ。

『自分が生きているって、今の僕のこの状態が全てだろうに！ そ  
れ以外に……』

ひたすらこれの繰り返し。きりが無い。

しばらく不毛な時間が過ぎた。

そろそろ終わりにしないか…… 馬鹿らしい。いい加減、疲れた。  
喉がもうダメだ。自分の声が濁声に変わっていることに気づく。  
とりあえず、冷たい水が欲しい。神経まで染み通るような、冷た  
いやつが。そんな気分。

姿の見えない言い合い相手も同じようなものだろうか。  
お互いだんだん静かになってきて、重い空気が流れ始めた。  
何だろう？ 僕としても、ここまで叫び尽くした気分になると、  
動揺が少しは収まってきたようだ。

「もういいじゃん。疲れたよ……」

叫んでいても仕方がない。穏やかに話をしたら、少しは何か分かるかもしれない。

声のトーンをコントロールして。

「あなたの名前は、何て言うんですか？」

改めて聞き直してみた。仕切り直しした方がいいだろうし。

「……私も大人げなかった。

だが、おまえが死んでいるというのは真実だし、嘘ではない。そろそろ理解してくれ。

名前は、教えられない。色々と事情がある」

結局、そいつは少しの沈黙の後、落ち着いた感じにそう言っただけ。

叫び合っていた時よりも声は座っていたが、僕は死んでいる、つてのは絶対事項らしい。

だけど、これじゃ埒があかない。僕としても納得できないし、腹の虫は収まる筈がない。

「なら名前は聞かない。あなた、とだけ呼ぶ。

じゃあ、あなたは どうしてそこまでして僕を死人にしたい？ 殺したいの？

僕だって、一応生きていたいと思う普通の人間だ。いきなり死んでいる、つてのは理不尽だ。

理由を教えてください。どうしてあなたがそう思うのか？」

抑えたつもりでも、どうにも言い方は悪くなってしまったか。自分の口調の中に嫌味が混じっていなかった、と言えば嘘になる。でもある程度は仕方がないってものだ。と思っていたところ。それを言い切ったかどうか、ぐらいの際どい所で。

「好きで言っている訳じゃないんだよ、この分からず屋が！  
死んでるのを死んでいると伝えてやるのは親切。違うか！ 事実  
だろうが！

お前が受け入れるかどうか、それが全てだ！  
理由？ そんなに私を怒らせたいのか！

私がそれを説明することができれば、解かることができればどんなにいいか！ おまえごときに解かってたまるか！」

そいつは凄まじかった。さらにヒートアップしていた。

背中がすっかり冷え切ってしまうほどに、その怒鳴り声は殺気を纏っているかのように鋭く。

そんな声を発した奴が、真っ暗な中自分のそばにいる。この真っ暗な空間、そのものに恐怖を感じる。

そう考えれば身体中が竦んでしまいそうになる。  
でも、今の僕は違った。不思議と身体は震えなかった。

身体に何とも言えない高揚感が募る。窮鼠猫を噛む。無我夢中だった。

「あなたが何様かなんて知ったことか！

理由も無しにそんなこと言われて、はいはい俺は死んでいるって納得する奴なんていねえ！

ぶっっちゃけ、こんなの自分から覚められない悪夢じゃないのか？  
知ったことか！

何の理由があるのかと思えば何も無い？ それで受け入れるも何もあるわけねえ！

あなたは神か何かなのか！」

吐き切った後、一瞬スカツとした。反射で怒鳴り返していた。けどその後、後悔に似たようなものがじわじわと。

これじゃあ話し合いにならない。それに何より、また怒鳴り声が返ってくるじゃないか……

次に返ってくる怒声に身構え、これからを考える。

……だが。何も返って来ない。当然来る、来たと思っていった第二波が来ない。

拍子抜けし、首をかしげていると。

しばらくの沈黙の後、向こうからは泣き出しそうな、それでいて叫びも怒鳴りも入っている弱々しい声が届いた。

「確かにそうかもしれない。おまえから見たら、な。

だがな。私にもどうにも説明できない。だから困っているんだ……私でも、こればかりはどうにもならないんだ……

夢、なんて言ったらこの世界は全てそうなってしまっただよ……」

どうしていいのか分からなくなってしまった。

間違ったことは言っていない、はず。至極当然な事を尋ねて、その答えを求めていただけのはずだ。

なのに、僕の近くに居るであろうその”存在”は、強い口調ではあるが今にも泣きだしそうだ。

どうすればいいんだよ、まったく。

その時だった。

『シエワードよ、おまえもいよいよ”仕事”を始めてもよいのでは

ないか』

この空間がどれくらい高さがあるのかは分からないし、そもそも天井があるかどうかとも分からない。  
強いて言えば天から声がした。



### 第3話：お互いの世界の距離（前書き）

距離。縮まることも、広がることもない状態を基準として。

互いに適当な距離を定め、無意識にそれを守ってきた。バランスを取る為に。不必要な軋轢を避ける為に。

でも、そうとは限らない。

近づきたいと思っているものもたくさんある。その多さを意識していないだけで。

そして、近づこうとしたその結末は……

### 第3話：お互いの世界の距離

僕にはもはや何がなんだかさっぱり分からない。というかお手上げ。

目の前のよく分からない”存在”だけで手一杯だ。それ以上に他の事に回せる分の脳味噌なんて余ってはいない。

「あ、あなたは……」

あの者が、わ、私の”パートナー”だということですか？ 「冗談じゃない！」

待ちに待って、あれですか？ 何かの間違いです」

だが、どうやら”存在”の方には心当たりがあるらしい。すつかり冷静さを失っている”存在”。

その地に足がついていない声に、

『私が言う事が間違っている？ そのような事、過去にも未来にも、無論、現在にも無い。』

おまえの目の前にいるあいつがきつとおまえのパートナーになる者だろう』

はつきりとした声は一点の淀みも無く、きつぱりと言い切った。何となく、只者じゃない。言い切った端からも、威厳のようなものを感じさせる。

というか、「あれ」とか「あいつ」って僕の事？

それつきり、天の声も”存在”も黙り込んでしまった。

パートナーって、僕がそれと何の関係があるのだろう？  
そもそも、どうして天から声が聞こえてくる？ 思うに、あの声はよく通ってはいるが、スピーカー越しではなさそうだし……  
そんな事を少ない脳容量でごちゃごちゃと考え始めた頃。

「そうか、おまえにもついにパートナーができたか…… 感慨深い  
の。」

これでようやく仕事が始められる、といった感じだな。良かった良かった、シエワードよ」

先ほどの声とは百八十度裏返った感じで、今度は底抜けに明るい響き声でした。

思わず驚きが口から洩れそうになるのを押しとどめる。

一方、その声からシエワードと呼ばれている”存在”にとってはいつものことなのかもしれない。

驚きもせず、ただ声音だけ落として溜息でもつきたそんな感じで答えている。

「恐れ多いのですが、どうしてあれが私の”パートナー”だとあなたには分かるんですか？

特に何かいいところがあるとも見えませんし、何より、私にはどう見ても自分とはそりが合わない感じがするのですが。

はつきり言うと、私は嫌です」

言葉は丁寧だが、刺々しい。明らかに嫌々なようだ。

何のパートナーかは知らないけど、別にどうでもいいんだけど、そんなことはどうでもいいのだけれども、あそこまで毛嫌いされると少し傷つく。

でも僕は心の広い人間なので、その辺は流しておく。

ま、訳の分からない奴らとはなるべく関わりたくないし、お互い利害は一致している。

ところで、僕自身も落ち着いてきたようで、ちょっとした事を色々と感じづくようになってきた。

例えば、”存在”の声。男っぽい感じの雰囲気だと始めは受け取っていたのが、よくよく聞くと、凜とした女性の声、のような気がしてきた。

それに、天の声、とは言っても、天から声が雨のように降ってきている、という感じではない。

どこか遠くから、一点に向かって話しかけているかのような感じだ。そこがスピーカーと違うような感じのするところ。

……それと、もう一つ。

僕にとっては、”存在”の声とか、天がどうだとか、そんな事はむしろ今はどうでもいいって事。

僕が、あいつらの言う通りとつくに死んでしまっていたとしたら、そんなことが急に不安になってきたのだ。

もともと不安だったけど、一息吐いてから改めて向かい合ってみると、自分が間違っている気がしてくる。

自分に言い聞かせているだけでは不安だ。

何か、確たる証拠が欲しい。

考えていてもはじまらない。

それに、今僕がうとうとと考えごとにつけていている間にも”存在”と天の声はどこか噛み合わない会話を続けている。

このまま黙ったままジツとしていると、何だかおいてけぼりになりそうな感じがするし。

びくびくしながら二人の会話の間に言葉を搾り出した。

「……あなた達は、どなたなんですか？」

「というか、あなた達二人はどうして姿が見えないんですか？」

いかにも普通だと思われることを、順当に聞いてみた。  
どんな答えが返ってくるか。それに注目だ。

「どなた、といわれてもな…… 今の段階では何にも説明できないんだよ、私達については。」

そうだな。おまえが、私の目の前にいるシェワードに協力してくれるというのなら、多少の事は囁いてやってもいいが？」

天の声は、何故だか僕に”存在”のパートナーなるものになって欲しいらしい。

「だから、どうしてあなたはあれを私のパートナーにしたがるんです？

人間ならこれまでもいくらかはここにやってきたのに、あなたがこんなに積極的になるのは珍しいように思います。

どの辺りにそんなに確信を持っていらっしやるんですか？ 私には分かりません」

”存在”はだんだんと不機嫌を募らせているようで。相変わらず、囁み合わないなあ。

天の声がどうして僕をそこまで持ち上げるのか。それが気になるところ。この会話はそれに尽きる気がするんだけど。

僕がふとそう思った時。

それを読んだかのようなタイミングで、天の声は、一気に声のトーンを落とした。

最初と同じトーン。荘厳とした、重々しい声に近くなった。

「私は、これまでに幾らも人間達を見てきた。奴らには数え切れな

い程のタイプがある。

おまえだって、それはこれまでから承知している事だろう。

私は感じるんだよ、あれから。おまえが足りない所を、あれは助けられる。

あれは、ぱつと見そんな逸材には見えないが、中に何かを秘めている。

まずあれの死に方からして、の」

……え、死に方!?

顔からあつという間に血の気が失せていくような気がした。

何故そういう話になるんだ。二人共まるで、僕が死んでいるのが前提、みたいな話し方をする。

僕がああ天の声の威厳に当てられているのだろうか？

ますます不安になる。そう思いたすと止まらない。

冷静に考えられなくなる。僕は死んでいない。頭の中がそれだけになりそうだ。細胞がそれだけしか伝達しなくなる。

とにかく、だ。

一旦、あいつが知っている僕の死因なるものを聞かせてもらおう。どこまでそれが説得力を持っているのか。そこだ。

「今、僕の死に方を知っている、みたいな事言いました？

どういうことか…」

これで何とか話を進めよう、と思ったところで。

「いや、断じて私は認めません！

あんな奴を私はここで長々と待っていたなんて、認めたくもない。

あいつの死に方なんぞ、私にとってはどうでもいい！ あなたの目が曇ったのではないですか？

まず、どうせ何を言ってもあれは私たちを信用しませんよ。それで私は困っていたのではないですか！」

思いもよらぬ横槍が入った。いきなり”存在”が大声で怒鳴ったのだ。

一瞬、何がどうなったのか分からなくなりそうだったほどだ。

僕は、何にも言葉が接げなくなってしまった。

だけど、ある意味良かったのかもしれない。頭の中が少し冷めて、溜まっていた血が少し下りたようだ。

かっとしすぎていたんだ。僕らしくない。

第一に、ここは、僕がこれまでに住んで来た世界とは本当に全然違うところなのかもしれないって事。

頭にさっきの”存在”の弱々しい声が横切った。

『確かにそうかもしれない。おまえから見たら、な。

だがな。私にもどうにも説明できない。だから困っているんだ……私でも、こればかりはどうにもならないんだ……

夢、なんて言ったらこの世界は全てそうなってしまつんだよ……』

僕は生きていて当然だと思っている。

無意識に生まれて、いつの間にか大きくなって。

一日一日を気付かぬうちに積み重ねてきた。それが生きるって事だった。

死ぬ事は、これまで自分が過ごしてきた世界から去る事。輪廻転生、来世の事はひとまず避けて。

でも、あのシェワードって呼ばれている”存在”からしたら。

この世界は、そこが根っこから違うのではないか。

だって、そうでもなければ、

”おまえは死んでいる。それは説明するほどでもない”

なんて無茶な説明をここまで一生懸命に通そうとはしない。もし僕なら、言っている自分の方が居たたまれなくなってくるだろう。

それとも、よほど重度の厚顔無恥ってやつか。

いや、それがさも当然のように通ると思っているらしいのだから、やっぱりこの世界の方がずれているのではないか……

普段ならばこんな事は絶対に考えない。

当たり前の事だけど、それほどに、自分の生きている世界”人語を解する生物の存在する唯一の世界、これは僕の中では絶対のものだから。

それを考えさせてしまっている一番大きな部分は、やはり、自分の身体が直に訴えてくる違和感だ。

ここに来た当初は、身体がまるつきり動かなかった。

今ではだいぶマシにはなったが、それでも身体中を通っているはずの神経が一斉に鈍くなったような感覚は残っている。

身体の奥が落ち着く事無く、常に訴えてくるのだ。ここはこれまでに住んでいたところでは決してない、と。

夢の世界なのか、死後の世界なのか、それ以外の思いも付かない世界なのか、そんな事は何も言えないけど。

今居るここは、僕がこれまで生まれ育ってきた場所じゃない……理性では抑え切れない部分。頭に上っていた血が引くと、身体の底の方で、本能が勝手に機転を利かせて。

そのまま、勝手に押し込まれてしまいそうになってきた。



……これ以上先に思考を進める事は、無理矢理止めた。何より、それより先を考える事自体が怖かった。結局は、今の僕には正しい答えなんて導き出せないだろうから。今はとりあえず、結論にがむしゃらに近づきたがる気持ちを抑えた。

覚めた事を言えば。

本当に死んでいるとしたら。

僕が、死んでいると気づいていてもいなくてもそれに変わりはない。……その逆も然り。

そして、ここがどんな世界なのかが分からないのは、僕が死後の世界を知らないのと同じ事……

ふと思いついた。

これが、胡蝶の夢、ってやつだ。

この妙な世界に夢の中で迷い込んだのか。

この妙な世界にいた僕がうたた寝をして、その夢が、『僕の思っていた何気ない日常』だったのか。

悪く言えば、言いがかりみたいなもの。けれども、それは誰にも分からない。

死んでいるのか、いないのか。

どちらにしろ、今の僕が出来る事はそれを見極める事ぐらい。その後でしか、何にも行動のしようが無い。そのためにはどうすればいいのか？

……この『世界』がどういう世界なのかを知る。そこからだ。やるべき事は、何だかんだと考えても一つだった。

気がつけば、すっかり沈黙状態だった。

天の声も、怒鳴った”存在”の声も。誰も喋ってはいなかった。

「この世界がどんな世界なのか、もっと僕に教えてくれませんか？」

今思った事、そのままを。

闇の中、”存在”のいるであろう方向にぶつけてみた。

「そう、考えたか……」

一寸先も見えない闇の中。  
その声は、小さく囁いた。

#### 第4話：鏡の中の『死後の世界』（前書き）

裏とは、表の反対の事である。

ひねくれて考えると、素直ではない事である。

コインを投げると必ず表か裏しか出ない。真ん中はない。

裏とは、みんなマイナスに捉えがちだ。

しかし、ふと立ち止まって考えてみると、案外裏の方が正直なのかも思えないと思ったりもする。

なぜならば、裏の反対は表しかないから。

そんな、詭弁。

#### 第4話：鏡の中の『死後の世界』

「な……」

私は面喰らった。

何故今の流れからそういうことになったんだ？

あいつは、自分が死んでいるってのを断固としてさっきまでは納得していなかった。

なのに、手のひらを返したようにいきなりこの世界の事を教えて欲しいなどという。

なんだかんだで納得したのか？ いや、そんなにあっさり納得できるんなら、口論にはならなかったはずだ。

何か私の裏でも掻こうとしているのか。どうにも気持ち悪い。

何を企んでいるのか。全く読めない。

人間は、必ず何かを企んでいるんだ。経験でそれは知っている。

これまでも稀に同じような事はあった。

むしろ、私はそれを待っている。人間がここに来るのを。その為にここにずっといる。

ほとんどは、いきなりここにやってきて、

『ここは何処、あなたは誰？』

みたいな事をほざく。

私は適当に自分の名前をはぐらかして、私が何度もじいやに教えられてきた、決まり文句を吐く。

そこまでは、ポカンとして聞いているんだ。

だがここに居るといふ事が、あいつらに言わせると、死んでいるという状態なんだよ、と丁寧に説明してやると、決まって怒り出す。何故そんな事が分かるかって？ この世界は、奴らの言葉でいえ

ば、『死後の世界』だからだ。だが、私にも分かるのはそこまで。私にだって分からない。何故、この世界が『死後の世界』なのか。私だつてずっと知りたいたいと思つてゐるさ。この世界が、何なのか。彼らは彼らなりに大変なのかもしれない。でも、私には事実を伝えることしかできない。

何故？ と聞かれたら困る。知らないんだもの。

そのくせ私が、生きてるって証明できるの？ と問うと、私を根本から納得させる答えなんて返つてきたためしがない。

そうして、気づけば大抵の人間は私の前からいなくなつてゐる。その人間達がその後どうなつたのかは知らない。

そのこと自体は、言つてしまえばどうでもいい。

でも、その後じいやが複雑そうな声で、まるで私を労うかのようにな話しかけてくるのがどこか複雑だつた。

「何故、この世界の事が知りたい？」

無意識に声が出ていた。少し好奇心が疼いた。

変わった事を聞く人間がいたものだ。それを知つてどうなる。

どうせ、奴らの中では、この世界は『死後の世界』なんだろう？ なら、『生前の世界』に帰る方法とかを聞くのだろうか？

久しぶりだ。そんな事を聞いてきた奴も、これまでに何人かはいつたけな。

「さつきまであんな言い合いしちやつたのは悪いかなと思つてる。

けど、僕が死んでゐる、つてのは認めない。

だけど、あなたからしても、僕が死んでゐない、つてのが認められないんでしょう？

あなたからしたら、僕は死んでゐて当然。僕からしたら、自分は生きてゐて当然。

そして、どつちも確たる証拠が無い。

だったら、僕があなたの居るこの世界について良く知って、そのうえで自分で結論を出す。

それを考えるだけの時間があつたなら、自分で納得して死んでいいのか、生きているのかを見定めたいんだ。

いいかな？」

本当は何が目的だ？

聞き終わって思ったのはまずそこだった。なんと言っても唐突だった。

けど、確かに筋は通っている気がする。これまでの多くの人間とは違い、一応この世界の在り方も認める、と。その、私の姿すら見えない、自分の足元もおぼつかない状態で？

悪い気分はしなかった。

純粹に、ただ真つ直ぐにそういう意味なのか。

いや、判断を下すのは早計だろう。

でも、そちらがそういう態度で接してくれるのなら……

「……私が悪かったところもあった。

確かに、どこかで私が悪いところがあつたのかもしれないってのは認める。

私はシエワード。そういう名前。大事な人に付けてもらった名前。

自分が死んでいないと思うんだったら、自分の中では、少なくともそれが正しい事。それじゃ、私といくらドンパチャっても切りがない。

だから、一旦それは置いておこう。

……これでいいか？」

少しは前向きに接してみるのもありかな。そんな気分になった。自分は死んでいるかもしれないし、死んでいないかもしれない。

真つ暗な中で、その結論で満足できる人間。  
本当に久しぶりだ。こんな風変わりな奴に会うのは。

言い終わって、不安だった。

相手に自分の言いたい事がきちんと伝わるかどうか。  
だけど、その心配は必要なかったようだ。

自分の意見だけでなく、”存在” シェワードは、僕の側の意見も  
一応は『僕の中で正しい』ということを確認してくれた。

これまでの言い合いに比べれば、たった数回のやり取り。ただそ  
れで十分だった。

時間がどれだけあるのか。自分で言っておきながら分からないけ  
ど、頑張れるだけ頑張ってみよう。

自分で見極めた結果ならば、自分が死んでいたとしても本望。そ  
う言い切るのにはまだ抵抗があるけれど。

気持ち、”存在”が穏やかになった気がした。

「僕の名前は九条。九条涼太。」

これからよろしくお願いします、シェワード」

ホッと一息。良かった良かった、と心を撫でおろしながら軽く挨拶をする。

「おい、私の名前を軽々しく呼ぶな。」

それと、私はおまえを認めた訳ではないからな。

それ以前に、おまえがパートナーだったら、私は仕事なぞしない  
からな！」

……まあ、パートナーとか仕事とかには、シェワードもあんまり

突っこんで欲しくないみたいだし、深入りはしないにしても。

シェワードって案外子供っぽいのかな？ と。

でも、声からすると十七の僕よりは年上だし。あ、それだと僕の話し方とかはよく考えたらまずかったかな。

そんな、軽い気持ちで割とどうでもいい事を考えていると。

「そうかそうか。何とかかなりそうではないか、シェワード。

ならば私の方で、は只今を以って『臨実試験』を始めるもの、として受け取っておくからの」

天からの声が、更にさらっと意味不明な事を言った。

だが、その声は威厳に満ちた厳しい声ではなく。どこか優しげな笑いを含んだ、軽やかな声だった。

「え、あれ！？ そんな、私はまだ認めていない、と言ったじゃないですか。

そもそも、あれには私のパートナーは務まらないと思いますよ？ 誰にもこなせるってもんじゃないでしょうし……それに、もっと適任が」

慌ててシェワードが返す。

「ふむ、ならばシェワードよ、誰か他に、適任だと思う人間を知っておるか？」

「……いや、それはこれから出てくるかもしれない、という事でーっ」

「要は、今はあれ以上の適任が見当たらない、ということじゃな？ ならば良いではないか。



何も、『臨実試験』を受けた時点でパートナーだと決める、という訳でも無かるう？

ただ強いて言えば、「パートナー見習い」という扱いにはなるであろうが」

……話に全く付いていけない。

ところで、何について、誰のパートナーなのか？ それが一番の問題だ。

特別な技術の要る高度な仕事を手伝うパートナー、という事ならばシェワードの言う通り、僕では正直厳しいと思うんだけど。

それに、シェワードもあそこまで嫌がっている事だし。

「まあ、その辺は……」

適当に間に入っていこうとした。

しかし。途中から突然、自分の声が出なくなった。

第5話：先代からの頼み（上）（前書き）

周りに誰もいなくなると、自分の周りが全て無くなって消えてしま  
うような錯覚を覚える。孤独という一言に閉じ込めることは出来な  
い程にそれは怖い。

でも、周りに頼れる他力がなくなった時に、その人自身が出てく  
る。良い意味でも、悪い意味でも。

## 第5話：先代からの頼み（上）

いきなり声が出なくなつた。

焦つて大声を出そうとしても、それで出ればそもそも問題は無い訳で。

無駄なあがきをしばらく続けた後。

そして結局、この世界には僕の常識が通用しないんだし、こんな事もあるさ、と。そんな結論に達した。

そんなに簡単に諦めてもいいのか、とは考えない方向で。

仕方ない。しばらく待つていれば、何とかなるかもしれない。

そう思つて、真つ暗な空間の中で、ボーっとしてみる事にした。

- - - - -

真つ暗な闇の中。

電気が消えた真つ暗、みたいなのは、しばらくすれば眼が慣れてくるはずなだけだ。

でも、ここではまだ何も見えない。この空間の中に存在する全てのものが黒という色しか持つていないのか、とさえ感じる。不気味だ。

目を凝らしてみても、眼が開いているかどうかすらも自分では分からない。

自分の顔に、恐る恐る自分の指を添わせてみる。

唇。鼻。そして、もうちょい上。この辺り、左右に眼がある。眼球を突かないように、そつと周りに触れていく。

自分の眼のまぶたに指が触れてから、ふと思つ。

こんな事しなくとも、自分の身体じゃないか。

不安になる。もしかして、眼を開けている、という自分の感覚が

しつかり働いていないのではないか？

そのままでは恐る恐る瞬きをしてみると、眼球の動きが指に伝わってくる。ちゃんと目は動いているんだ。

当たり前だ。当然の事だった。

静かだった。何もやる事が無い。じつとしていた。

足を動かすのは怖い。一步でも動いたら、僕がいるこの地面以外の部分は底が抜けているかもしれない。そう思うと、動けない。

そういえば、この真つ暗な空間に来た時からずっと同じ場所に突っ立ったままだった。

シェワードと口論になってた時に無意識に動いたかもしれないけど。もともと何処にいて、今何処にいるのか。それすら分からない。意識すれば、急に足が疲れてきた。

ちゃんと、足に神経は通っている。ふと、そんな当たり前な事を考える。自分の右腕をそつとつねってみた。ちゃんと痛かった。

どうにも落ち着かなくなってきた。

少しの時間は、いっそのこと眼を瞑ってじつとしてみた。

次に、手が伸ばせるところまで、手を伸ばした。そして手探りで360度、触れるものを探してみる。

その辺りに四つん這いになって冒険しようとした。でも、しゃがむことすら怖くなっていて、無意識のうちに足が固まっていた。

しかし、何も無かった。

そこが僕の限界だった。

声が出ない。目は開いているけれど、何も見えない。何も聞こえない。もう無理だった。

怖い。どうしてここで落ち着いて人と話なんてしてたんだ？ そんな事が不思議でたまらなくて。

誰か、何でもいい。喋ってくれ。シェワードでも、天の声でも何でもいい！

……もしかして。

シエワード達に見捨てられてしまったのか？

僕は、何にも悪い事なんて言っただけでなかつたのに。

いや、何か僕の何気ない一言で、傷つけてしまったのではないか？  
それどころか。シエワードが僕とほとんど正反対の物の捉え方を  
持っていて、僕の言葉がほとんど全て思わぬ鋭い凶器になっていた、  
とか。

それを聞いて、何だか知らないが好意的だった”天の声”すらも  
僕を見捨ててしまった、と。

それで、ここによく分からないまま、たったひとり。

自分では叫んだつもりだった。

寂しい、って。嫌だ、怖い、悪かった、色々な感情をすべて口に  
出した、つもりだった。

どれくらい時間が経っただろう。

自分では、声が枯れるぐらいに叫んだ。

でも、その声は自分の耳にすら一言も届いて来ない。

このままだと、僕というものが真つ暗な闇に埋もれて、誰も気付  
かないうちにいつの間にか消えてしまいそうに感じて。

気が狂ってしまいそうになってきた……同時に、めまいがしてき  
て……

高層ビルの屋上から突き落とされたみたいな感触に身体が包まれ  
た。そして、それが自分の身体が倒れている感覚だと思ったのが最  
後。

そのまま、意識を手放した……

「……悪いな、荒療治で。」

まあ、姿ぐらいいは償いに見せてやるべき、かの」

呟いたのは……

「大丈夫か？」

天の声のお情けか。遠くから声がする。

そうか。あの真っ暗な中で気を失って、今に至っている、と。

目をうつすらと開けようとする、眩しくて開けていられなかった。

「おっと、眩しすぎたか」

天の声が聞こえたかと思えば、自分の周りがぱっと目を開けられるぐらいの暗さになった。

周りは、さっきまでの真っ暗を薄めたぐらいの明るさになっていて。

空間には白黒の濃淡があつて、上に行くほど薄く、下に行けば黒くなっていた。グラデーション、っていうのかな。

自分の身体は地面に横たわっていて、周りは薄黒い霧に包まれているみたいだった。

さっきまで真っ暗な中にずっといた僕にはちょうど心地良かった。自分の姿も、そして自分の近くなれば目が利くようになった。

「先程はすまなかつたな。

だが、どっちにしろ一回は経験しておいた方がいい事じゃろうし、許してくれ」

ハッと気づけば、誰かが隣に座って僕の方を見て笑っていた。

年の頃は五、六十の男。

長身で、細長い顔。立派な白いあご髭。髪の毛はやや白がかった。

白っぽいシャツにグレーの上着を羽織り、下は黒のスラックスを穿いている。

あと、音楽でも聞いているのだろうか？ 何故か片方の耳に、イヤホンみたいなをつけている。

若さの残るイギリス紳士がそのまま十、二十年ぐらい歳をとったような。

印象は、よく言えば優しそうで、慎重に見れば怖そうで。要は、さっぱり分らない。

若そうな表だちとは裏腹に、内からは、一種の神々しささえ放っていた。

「……………誰ですか？」

起き上がり、ワントempoずれながらも軽く座りなおしながら尋ねる。

この意味不明な世界、敢えて言えば夢世界に来て、初めて人というものを見た。

本能、だろうか。すごく心が温かくなる。何故か、彼を見ていると心の中が満たされたような安心した気持になれた。

「そうじゃな。」

シエワードは自己紹介を済ませたようだったが、私はまだだったか。

では、少年。いや、九条涼太。

我が名は、クワーゼット。

……………この声、聞き覚えはないか？」

確かに、何処かで聞いたような。

しかも最近……………あ、天の声か！

「ふふ、ご明答。」

これからは、クワーゼット、で良い。

天の声、なんて大それたものではないからの」

「えっ、口に出てた!？」

こういつとこ、僕は無意識にやっちゃうところがあるから分からない。

でも、さすがにまだそこまでポケてはいないつもりなだけど……

「いいや、お主は別に口には出してはおらん。

じゃが、な？ 私には、おまえさんの心を読むなどと造作の無い事だ。」

ま、この辺りはシェワードにはまだまだ負けん」

「……」

何者なんだよ。今度こそ、口に出しそうになった。

でも、それを待たずにクワーゼットは続ける。

「私はおまえのいた世界のことなら何だって知っているし、その世界で起こった出来事を変えることだってできる。そんな存在。」

ついでに、お主ぐらいの若造の考えそうな事なら読めぬ私ではない」

彼は、何処かで聞いた事のあるような無いような台詞を含め、僕の耳元でぼそつと呟いた。



## 第6話：先代からの頼み（中）（前書き）

起こるべくして起こったものなのか、いきなり突発的に起こったものなのかの区別はつかない。それが現実世界。

起こってしまった事を、時に客観的に見れなくなる。でも、それはそれで良かったりする。

客観的すぎると、その基準が自分の中で埋もれてしまった時、自分自身で動けなくなるだろうから。

## 第6話：先代からの頼み（中）

「改めてすまなかった。

さっきのは、私があこの空間を一時的に固めただけだ。

何もおまえがシェワードに嫌われたり、私がおまえを見限った訳ではない。安心しろ」

そう謝られて、ようやくあの真っ暗な地獄を思い出そうとしてみる。

思い出すのも抵抗がある。

人間、ああいう空間にずっといると、ホントに狂ってしまうだろうな……

自分が確認できなくて、信じられなくなって、疑心暗鬼になる。

今、冷静になってはつきりした。やっぱり、僕は彼らに悪い事を何も言っていないかったみたいだ。まあ、ならば何よりだけど。

「では、何故そんな事をしたんです？

それと、ここは？」

「ここは私の空間じゃよ。あの真っ暗なシェワードの空間とは違う。何故、か…… その前に、お主はかなりのお人好し、じゃな。怒っておらんのか？」

まあともかく。確かにこの世界は、おまえさんが先ほど考えていた通り、おまえさんのこれまで生きてきたところとは違った世界じゃ。

この世界にいる以上、一人だけの真っ暗な空間、つてもものを一度は知っておいた方が自分のためじゃろうし」

ちょっと複雑そうな顔をして答えるクワーゼット。

怒る、という前に、怒っていいものかどうかも分かっていない僕。しかし、どうにも理解できない。

そもそもにクワーズットという存在が僕の理解の遙か外側のものだった。

『ここは何処にいるのか？ 私的空間だ』

これは、分かったような気になっておく。

『何故そんな事をしたの？ 一度は知っておいた方が自分のためだから』

……こっちは、どう考えてもそれだけだと納得のしようがない。

要は、何一つ僕には納得、というか付いていける部分すらなかった。

「ふむ、まあ仕方ない事。

おまえさんは、自分がここに来た『きっかけ』すらも知らない様子じゃったしの。

時々おる。そういう人間も、な。

でも、そのあたりの事を詳しく説明するのは今の私の役目ではない。

その辺はシエワードと仲良くやってもらうしかない」

複雑な顔は崩さず、クワーズットは続けた。

彼らに言わせてみれば、僕は死んでいるからここにいる、んだろ？  
って事は、彼の言う『きっかけ』ってのは……僕の死因の事？

そういえば、さっき聞こうとして曖昧になってはいた。ここでは  
つきりさせておくことがお互いの為では……

「いや、今はそれで良い。お主の考え方なら今のままで、な。  
そんなお主だからこそ私が見込んだ。

ただ、これだけは言っておく。

『この世界』と、おまえさんのこれまでいた『生前の世界』。この二つは、対極の関係にあるもの。

そして、それぞれの世界が持つ世界観などはそれこそ正反対に近いじゃろうな。

お主は、ここに来てからすぐにそれに気づいた。そして、冷静になれた。

シェワードの、あいつの気持ちを考えられるぐらいに。

この世界に来た時、みんな戸惑うんじやよ。

おまえさんの採った考え方は、この世界である意味では一番正しいものかもしれん。

正解は無い。あとは自分がどう考え、どう行動するか。それが全て、よ。

時間はたつぷりとある。というか、時間という概念が存在するかどうかもこの世界じゃ怪しい事。

私やシェワードの事はよく分からないだろうが、ここは一つ、私の願いを聞いて欲しい」

分かったようで分からない返答だった。

それに、自分の思っている事、言いたい事をここまで全て読まれてしまうと、逆に自分自身が不思議なモノに思えてくる。

今、自分は果たして何を信じるべきなのか。

そもそも、何故彼はそんなに僕を買ったのか。

分からない事だらけで、どこから手をつけていいのかさえ分からない。

さつきから何度も目を開けようと、夢から覚めようと、隙あらば試している。でも、それは一度も成功しない。

これが噂に聞く、金縛りってやつか。

それとも、本当にここが死後の世界なのか……

本当の事を自分で見極め、納得したい。

それゆえに、この世界の事をもっとよく知ってみたい、と。そうシエワードには言った。

けれどもそれを裏返せば、自分で見極めがつくまでは、何事にも納得しないという事。

まず、何故時間はたっぷりとあるって言い切れるんだ？ 時間の概念が無いってどういう事なのやら。

考える事が沢山あって、ありすぎて。そして、それらを考える材料がちゃんとした正しいものなのかも分からなくて。

「途方に暮れるなよ、少年。

おまえさんは、まずはこの世界の夢であれ何であれ、認めようとしておる。

それは立派な事。それに、なかなか出来ない事じゃよ。納得できない事など、とりあえず分かったようなフリをしておくがよい。

分かった、と百度繰り返せばもう分かったような気持ちになるわい。試してみるがよい。気付けば何かしら分かっておるうて。

自分なりの、この世界の全体像を描いてみればよい。これからゆっくりと、な。

夢は自分からは目覚められないもの。じゃろ？

その夢が長いか短いか。そんな事は無意味じゃ。夢の長さ、なんて考えるだけ野暮。捉え方によってはほぼ無限大ではないか。

だったら、折角のこの機会をエンジョイするがよい。何事もポジティブに、な？」

「……では一つ。

どうしてあなたはそこまで僕を買い被るんです？

僕には特別なものは何も無い。なのに、どうしてそんなにも自信

を持って僕を後押しするんですか？」

結局はそこがまず知りたい。

クワーゼットってよく分からないけど、能力値からしたら絶対に僕みたいな人間とは別次元にいる人間だろう。纏っている口調、雰囲気だけ感じてても只者じゃない。

まず人間なのかどうかも怪しい。夢の中にいきなり登場した全知全能の仙人かもしれない。

そんな存在が、何故僕をそこまで持ち上げるんだよ。そこが絶対不自然だ。夢だから、そう無責任に言う気になれないのが今の状況。

「私の眼力。その一つ。」

今は詳しくは言えんが、強いて言えば、お主が『いい人間』だと感じたから。それに尽きるわ。

だが、お主程度の人間にそんな飛び抜けた超人的なものを見出しではおらんよ。安心せい。

シェワードのパートナーに推すのは、私の眼力。それだけじゃ」

軽く肩をすくめて、包み込むような雰囲気を感じさせるクワーゼット。

彼の言葉には重みがあった。

声が凄んでいた、みたいなの、その種の事ではない。

一つ一つの単語、それを繋げた言葉そのものが、何か形を持っているかのよう。

だけど。僕には納得できない。

「……何故、僕なんですか？」

パートナーって何の事かは分からないけど、大事なものなんですよ？

なら、この世界に来て何にも知らない僕に務まるのかな、と自分

でも思っんですけど」

分からなかった。

一旦深呼吸をする。

どうして、僕が『いい人間』だ、ってあいつには分かるのか。自分の事は自分が一番知っている。その漠然とした『いい』というのは何を指しているのだろうか？

僕はこれまでどんな人間だったんだろう？

自分の奥へと改めて自問してみる。

僕の名前は九条涼太。

あまり目立たない学生生活を地道に積み重ね、今は地元の県立高校の二年生。

十七年間、自分なりに生きてきたこれまでの様々な出来事が頭の中に浮かび上がっては沈む。それを幾度となく繰り返す。

目立って陽に当たったこともほとんど無く、そんなに悪い人間ではなかったとも思う。

言ってしまうえば、実に地味な十七年間だった。

そして、その中をかなり鼻屑目に探してみても……

やっぱり、僕には人に堂々と自慢できるものなんて無かった。

かなり穏やかな性格、だった。良し悪しはともあれ、ほとんど怒った事が無い。

たまに、だけど何となく人助けを試みたりもする。

ぶっちゃけ、そういう意味では悪い人、というよりもいい人に近かった気がする。

けれど、そんな事を考えてしまう時点で、僕は所詮偽善者だった。優しくかったと思うのは、他人を怒らせる勇気が無かったから。

もっとはつきりさせてしまえば、究極、人に感謝された、好感を

持たれたいが為の行いだった。

天然の偽善者、なんてのは存在しない。天然、って言葉からそもそも偽善は生まれなйдらうから。

けれど、そんな人がもしいたら。その人はどんなに幸せだろうか。自分が人に感謝されたくって善行を積んでいる人間だと気付かない人間は、どんなに晴れ晴れとした気分なんだろうか。

自覚していた。僕が人に優しくするのは、鶴の恩返しのような物を信じてやっているのだと。

交番にお金を持っていけば交番にいるおまわりさんが誉めてくれる。

運良く落とし主が現れたら、お返しにきつと何かくれるだろう。勿論、これが理由の全てだと言う訳ではない。

後の残りは、人に嫌われなくなかったんだ。要は、八方美人だった。

「僕は、あなたが考えているような人間じゃない。それは自分が一番知っています。だって、僕は……」

僕は、期待されるような人間ではない、そう言おうとした。

クワイゼットは、赤子を寝かせる時の母親のような声で、僕の声をそっと遮った。

彼の上着の裾が、そっと揺れて。

「おまえさんは、おまえ自身。

それ以外、自分なぞ見つからん。

何も、特殊能力なんぞを期待しておるわけではない。

シェワードの傍にいてやって欲しい。ただそれだけの事だ。

確かに、パートナーはとてつもなく大切な役目。

だからこそ、シェワードはあの真っ暗な中、ずっと独りで待って



いた。

自分にふさわしい人間が現れるのを、な。

おまえさん、さっき体験したじやろう？ 真つ暗闇の中、一人じつとして居る気持ちは。

シエワードの場合、不意打ちでは無かった。だがその代わり、気の遠くなるほどの長い時間を独りで過ごしてきた。

私としては、これ以上シエワードに一人ぼっちでいて欲しくないんじゃないよ。

そう思っていた時に、おまえさんが現れた。だからこそ、私がここまでして頼んでおる」

「でも、それでいいんですか？

そもそもに、それならば尚更シエワードの判断を大事にしてあげるべきでは？

それに……気になったんですけど、あなたはシエワードとはどんな関係なんですか？」

話の根は深そうだ。

そういう事ならば、僕はやっぱりそのパートナーとやらに軽い気持ちでなっっちゃ駄目だろうし。

「ふむ、それも一理あるがのお……

でも、シエワードに任せておつて今まで全く決まってお来なかったのが問題の一つでもあつての。

あ、言っていないかったか？ 私は、シエワードの父親じゃよ？」

## 第7話：先代からの頼み（後）（前書き）

無知。自分が如何に無知であるかを知る、というのは難しい。口ではいくらでも言えるが、そもそもにそれで自分を暗に納得させようとしていることにすら気付かない。全て知っている世界と、何にも分からない世界。どちらの世界で生きた方が楽しいかを考えてみる。すると、知らないうちに無知であることを望む自分がいた。

## 第7話：先代からの頼み（後）

ある意味、この世界に来て初めて納得できたことかもしれない。  
なるほど。それならばさっきまでのクワーゼットの言いようも理  
解できる。

分からないのは、

「シエワードの理想が高すぎるのか、はたまた籤運が悪いのか、か

……

まあ、どちらもあながち間違いではない、がな」

『なぜそんなにシエワードのパートナーとやらが決まらないのか？』  
僕が頭の中で考えようとした内容の、その返答の先が返ってくる。  
こうまで全てを完璧に見透かされてしまったのは、もう笑うしか  
ない。

「まあまあ、私にしてみればこれぐらいは朝飯前、と言っほどの事  
でも無いがな。

言ったであろう？ おまえさんのような若造の考えている事など  
お見通しだと、な？」

僕をなだめるように軽く笑ってみせて。

もう僕はどうすればいいのやら。

「それで、の？

シエワードに何故パートナーが出来ないのか。

私と思うに、幾つかの原因があると思うのじゃ。

一つに、あそこに人間が落ちてくる事自体がかなり稀である事。

そついう意味では、おまえさんも選ばれた人間だと言えなくもない

の。

二つ目に、シェワードのあの性格。

私が言うのもなんだが、あいつはものの言い方がきつすぎるので、これまでに色々とあったから仕方ない部分もあるのかもしれんが

……

そして三つ目。これが一番直接的なんじゃが、二つ目に繋がっていると言えなくもない。

要は、あいつのきつい言い方では、おまえさんの時みたいに『おまえは死んだ。何が何でも死んだ』

みたいな話になって、言い合いになってそのままどうにもならなくなるんじゃよ」

クワーゼットは、やや表情を硬くして僕の方から目を反らす。

昔に色々あった、ということだろうが。

気になったのは、目を反らした瞬間の彼の表情が少し哀しそうだったこと。

だけど、その一瞬に彼の温もりが詰まっていた気がした。

「じゃが、な。

私の出番は、もう終わった。

おまえを見た時にそう思った。

何故だ、とは訊くな。

理由なんて何も無い。直観、じゃ。

だが、悔ってもらっては困る。私やシェワードの直観は、その辺の人間達の適当な思いつきとでは次元が違うので、の」

彼は再び、笑っているのか苦笑いなのかよく分からない表情をこちらに向けた。

目の前にいる、何でも見通してしまいそうなクワーゼットの直観。半端では無いだろうというのは分かるが、それでも。

しかも、タイミングよくやってきただけの僕を見て、直観。それだけで、自分の出番は終わった、って。

それで良いのかよ。あり得ない発想だろうに……

「いいも何も、そもそも私にはあの子の面倒を見てやる権利など無い。いいも何も、」

今が潮時、そう悟ったのみ。

変な事を喋っておいて勝手だが、これに関しては私とあの子の問題。口出ししたら許さん。

あの子にはこれから立派に一人前になってもらわねば困る。それが一番大切なんじゃない」

口元はそのままに、目を細めて。そして、そのまま続けた言葉には重みがあった。

確かに、過去に何か大変なあったんだろうとは思う。

それでも、それでいいのかよ。

声に出そうになって焦る。こういう本能的に短絡なところが僕の悪い所。

ここは、僕が口を出していい話じゃない、って。それぐらいは分かっているつもり。

この世界でいう父親、ってものは僕がこれまでにいた世界の中のそれとは違うのかもしれない。

でも、どうなんだろうか。父親、ってそういうものだったのだろうか。

僕の中の常識で判断するとズレている話だった。

「なに、おまえさんは、あの子の傍であの子と一緒に歩いてみてもいい。夢が覚めるまで。もし覚めるならば、な。

それだけで分からないなら、分からない事をあの子に尋ねればよい。

それである子の、シェワードの隣を歩けないと本気で思ったのなら、それは私の勘が鈍ったという事。

尚更、私はあの子の傍には居られんよ」

どこか矛盾しているところがあるのだろう。だが、クワイゼットの表情には真剣そのものだった。

ますます眼を細めたその眼光は鋭く、そのまま射すくめられてしまいそうなほど。

「なあに、そんなに怖い顔をするな、少年。

私があの子、シェワードの事が嫌いな訳無いじゃろつに。可愛くってたまらんわ。直には言わんが、の。

……お主になら、私の可愛い一人娘を任せてみてもよい。そう言っておるだけじゃよ。

表面では怒りっぽくて扱いづらいが、内面はなかなか素直なもんじゃぞ？

じゃあ、私はそろそろ行く。こつ見えても忙しいのじゃ。仕事があるのではな」

最後には、彼は胸を威張らせて笑っていた。

「失礼かもしれない。けど、あなたは不思議な人ですね。

温かいようで、それが見せかけにみえて、実は見えていない。肝心なところが分からなくって」

僕も、彼に合わせて何となく笑ってみた。

「ふふ、老人を悩ませる言い方をするでない。要は、温かくて優しさにあふれたやつだ、と言いたいんじゃない？それで良い良い」

そう言いながら、彼は僕の隣から立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。

付いて来いとも言わずに、だんだんと僕から離れていく。

「……では、頑張ります、と一言だけ。

あと、ありがとございました」

それを追うのはすごく野暮な気がした。

何故か分からないけど今は清々しくて。頑張ろって気にもなつて。

理由も無く一言だけお礼を言った。

「ふん、ここでの話はシエワードには絶対に内緒、じゃからな。それにもうしばらくの間は、さよならという訳でもあるまい。シエワードとお主がどうしても上手く行かぬようならば、またどうにかせねばならんしの。」

じゃあ少年。シエワードによろしくな」

そう言つと、クワゼットは上着の裾を揺らしながら足を速めてあつという間に去って行った。

……と、その時。

彼の上着のポケットから、何かが落ちたような気がした。

立ち上がり、もやの中に小さい星形をしたキラキラした落とし物を見つけた。

しかし、もう既にクワーズットを呼んでも返事は返って来なかった。



## 第8話：出発前夜（前書き）

現実には小説より奇なり。その根拠を一つ示してみる。突然だが地球の身になり切つて欲しい。分かりやすく、地球46億年の歴史を1年に圧縮してみる。1月1日からはじめて、現在を大晦日のラストだとする。すると、人類が誕生したのは大晦日の午後4時半になるらしい。さらに、現在の人間の直接の祖先ホモサピエンスが生まれたのもう紅白も終わった後の大晦日の11時半過ぎ。これで行けば、人類の歴史は30分も無い。その30分間に如何に人間が目まぐるしく進化し、今の私達が在るのか？地球からすれば、想像しようにも出来ない程に奇妙な現実、ではないか？

## 第8話・出発前夜

その落とし物は鈍く光を放っているあたり、ちょっとした宝石のようだった。

手のひらサイズで触り心地もツルツルしている。

寸分狂い無い正確な星形をしていて、そのど真ん中に小さいサイコロがくっ付いている。

サイコロの部分は透き通った水色。星型の部分は平べったく、出来損ないの流れ星のような、淡い黄色。

変わった形の宝石だった。

ここに放っておく訳にもいかない。

次にクワーズットに会ったら返してやろう。

そう思って、その宝石をポケットに突っ込んだ後、一息ついた時。急に目の焦点が合わなくなって、再び意識が閉じていった……

「まったく、じいやは。

どうしてこいつをここまでひいきするのやら。

自分のところまで連れ帰るなんて、よっぽこだ。

そもそも、私はこんな奴を待ってこの真っ暗な中でじっとしていた訳ではない。

人間など砂の数ほどいるだろうに。その中にはもうちょっとマシな奴だっているだろう。

私のため、とやってやってくれてるんだろうけど、それにしても……」

次に目を開けたのは、またしても真っ暗闇の中。  
気づけば、聞き覚えのある声が近くで一心不乱に愚痴をこぼして  
いるところだった。

「私にだって選ぶ権利ぐらいだってあるだろう。」

そりゃあ、じいやがこれまでに間違ったことなど一度も無かった  
けど、それにしても今回の唐突すぎる。

もう少し、前触れみたいなのがあってもいいじゃないか。  
私が見極めて……。」

こちらには気づいているのかいないのか。

ま、シエワードの姿がこの暗闇で見えるはずもなく。

「あの、シエワードさん？」

仕方なく、そっと声をかけてみる。

「……ん、起きたか。」

なら早速だが、これからおまえさん、どうするつもりだ？

大方、じいやの所で自己紹介でもされて、私のパートナーになる  
ようにと説教でもされたのだろう？」

いきなりですか。

ま、その方が単刀直入に話が出来て、やりやすいと言えばやりや  
すいけどね。

クワーゼットをじいや、か。

十分仲が良さそうなんだけどな……

と、そういえば。

「八割方はそんなところですよ。」

ところで、シエワードって人の心が読めたりしますか？」

気になったので、聞いてみた。

「ん、どうしてそんな事を聞く？」

……んん、いや、ノーコメント、という事にしておこう」

最後の方、声が少しニヤけていたような。

でも、シエワードには心を読まれているような感じはしない。

もし心が読めるのなら、死んでいるか生きているかであるかに口論しなくても済んだような気がするし。

……確証は持てないけど、まあいっか。

それよりも。僕には言っておくべき事がある。

「……クワイゼットに、パートナーになってくれ、とは言われませんでした。」

それで僕、あなたに付いて行きたいと思っています。

でも、それはクワイゼットに言われたからではないですよ？ 僕なりの結論です」

シエワードはそれを予想していたかのような、僕にも聞こえるほどのため息をついた。

「まあ、予想通りの話ではあるな。」

じいやが一生懸命頼んだんだろう？ ならば仕方無い所もあるだろう。

しかしその何処が『僕なりの結論』なのだ？」

その声は、どうにも馬鹿にしているような、蔑んでいるようなト

ーンだったけど。

「だって、僕はあなたのパートナーになるとは言っていないから。あなたに付いて行って、この世界をもっと知りたい。まずはそれだけです」

そう素直に答えた後、しばらくはシェワードから何の返事も帰って来なかった。

こいつには何か裏がある。

ずっとそう悩んできた自分が馬鹿らしくなるような話だった。

じいやがあれだけ持ち上げて、私がさんざん反対して。それを横でずっと聞いていてそれが。

結局、私とじいやで勝手に悩んでいただけかよ。

『なんでパートナーになるって決めたの？ 別にパートナーは

どうでもいいよ。それよりこの世界の旅先案内してくれない？』

何だよそりゃ。

まあ、あいつには何のパートナーなのかすら教えていなかったし、それはじいやも同じだろう。

仕事上の守秘義務に触る事なのだから、それはやむを得ない事であり、当然な事だ。

という事は。どうやら、あいつはそこまで深い事は考えていないのではないか？

純粹にこの世界について知りたい、と。

それで手頃な方法が、一番手短にいた私に付いて行ってこの世界を知る事。

なるほど。無意識にか意識してかは分からないが、この私を利用

してこの世界を知りたい、か。

意識してなら腹黒。無意識ならばある意味故意より更にたちが悪い。

あいつの話し方、その目からして……後者かなって気がするのが余計に疲れる。

「ふふ……そうかそうか、私をこの世界の旅先案内人に使うか。

私も舐められたものだ。

まったく……おまえと話すと、どうにも調子が狂う。そう来たか」

シエワードの怒り半分、呆れ半分の声が返ってきたのは、聞こえているのかいないのか、もう一度声をかけてみようかと悩んでいた時。

「ま、私もずっとここに居るのは暇だからな。

おまえの探検に付き合っただけでやる事にするよ。

私直々にこの世界を案内してやるんだからな。感謝する事だ」

その直後ため息と共に微妙な苦笑いが返ってきて。

呆れられているのか、怒りの沸点を超えてもう怒鳴るのも面倒なのか。

やっつけ感漂う気だるそうな声。でもま、お世話になるのは僕の方だし。

「改めて。宜しく願います、シエワード」

声の聞こえた方に笑いかけて、静かに頭を下げた。

## 第8話・出発前夜（後書き）

GWなので2話連続投稿、です。

これからも大体1週間に1話ペースをキープしていこうと思います。

## 第9話：『裏世界』事始め（前書き）

出発。『最初』に一步を踏み出す事。

途中がどうなっているか、無事に終着点に到着する事ができるのか。それを徐々に考えながら、気が付けば後ろは見えなくなっている。

反省は必要だが、過ぎた後悔は尾を引く。

そんな事は何にも考えずに走っていられる所まで。それがある意味『最初』の定義ではないか。



## 第9話：『裏世界』事始め

という事は、だ。

つまりは、あいつが特にパートナーとなる意思が無い以上、『臨  
実試験』は水に流れたって事だよな？

私はいいつに”この世界を案内してやる”事になっただけ。  
ならそんなに深刻に考える必要は無いではないか。

ちようどいい身体慣らしだと思えばいい。

私だつてずっとここでじっとしているのが好きな訳ではない。  
何事もポジティブシンキングで行こう。

「よし、では一通りおまえさんにこの世界を紹介してやろう。

実際に身体を動かした方が、口で喋るよりも手っ取り早いしな。  
私も退屈していたところだ。早速出発するぞ」

我ながら不思議な気分だ。

この世界を自分で見極めるために。

妙な目的だけど、その漠然としている目標のスケールが変に大き  
過ぎて、逆にやる気が湧いてきた。

夢ならば素直にそれで問題無し。

死後の世界ならば……とりあえず今は考えるのを置いておこう。

で、そうは言っても僕には今の状況がほとんど何にも分かってい  
ない。

具体的には一体何をどうすればいいのか。

そもそもに、この空間が真っ暗で何にも見えないのが第一の問題

なんだけど。

「ところでこの真っ暗な空間だと、この世界を紹介してもらおうにも何も見えないんですけど」

「だから、出発すると言っているのだ。

ここは私の空間。何もこの世界が全部ここみたいに真っ暗な訳では無い。

何にも言わず、とりあえず私に付いてこい」

シェワードは、何でもないように言うが。

「……でもまずこの真っ暗な中、僕にはあなたがどこに居るかすら分かっていないんですけど」

僕にしてみれば大問題だ。

付いて行くとか行かないとか、そういうレベルの問題じゃない。

「面倒な奴だな。

仕方ない。ならば、これを持っておけ」

シェワードがめんどくさそうな声で答えると。

真上から何かが降ってきたような音。

足元辺りで、トンと軽い落下音がした。

恐る恐る足元近くに手を下ろして。

その周りを四つんばいで這い回ってみると、ひんやりと冷たい、コンクリートのような地面があった。

手探りで周りを調べてみると、確かに何かが落ちていた。

それを大事に両手を使って拾い上げる。持ってみれば軽いもので、片手に収まるサイズのものだった。

よくよく触ってみれば、木でできた取っ手のように感じた。

「これは何です?」

「それを持っていれば、私がおまえを引っ張って歩いてやる。

よく考えてみれば、おまえには私の姿がどこに行こうと見えない。だから、それを利き手でしっかりと握っておく事だ。手を離れたら知らんぞ」

そうシエワードが言う。

言い終わった瞬間、取っ手が勝手に前に動いた。

「え!？」

つんのめって手を離しそうになり、それを慌ててしっかりと握り直す。

「では、これで準備はできたな?

ならば行くぞ。目を瞑れ」

さっきから、何をすればいいのかさっぱり見えてこない。

言われている事を飲みこもうとするのでやっただ。

「目を瞑って、どうするんです?」

至極当然の事を聞いたつもりが。

「ああ、面倒臭い!

どんだけ面倒なんだよ、お前は!」

シエワードが奇立ちを隠そうともせず、またため息。  
だんだんと申し訳なくなってきた。あのシエワードの言い方もか  
なりきついとは思っただけ……

そうは言っても僕にはどうにもしようがないじゃないか。

「分かった。まずは私の話を聞いてくれ。」

この世界は、一般には『裏世界』と呼ばれている。

ちなみに、おまえさんの言う生前の世界とやらが『表世界』だ。

で、この『裏世界』は数え切れないほどの大小様々な空間が寄せ  
集まってできている世界だと思えばいい。

その小さな空間から小さな空間へとワープするのが、私の言う、  
移動の事だ」

この世界は、『裏世界』と呼ばれている。これはそういうものだ  
として。

大小様々な空間がある、とか言われても全く想像がつかない。

それに、いきなりワープと来たか。なんだか難しそうだ。

でも、意外とファンタスティックな世界だったりして。

「じゃあ、どうやってワープするんですか？」

少しワクワクしながら聞いてみた。

「想像しろ、としか言い様が無い。出来ないなら付いてくるな」

さらっとシエワードは一言。

唾然とした。

『想像』しろ、と言われただけ。

僕に何をイメージしろと。

それに、シェワードにこれ以上質問したら真面目に見捨てられそうなのがしてきた。

少し黙って待っていてもシェワードはそれ以上何も説明してくれない。

僕は基本小心者なのである。

仕方なく覚悟を決めて、あえてさも冷静な口調でシェワードに確認を取る。

「想像、たとえば、行きたい所を頭の中ではつきりと思い浮かべれば良いのですか？」

「それだと、半分正解ってところだな。

正確には中継地点が要るんだよ。

そうだな……おまえがこの世界ではじめて意識を持った場所があるだろ？」

そこを經由して、目的地に行くんだ。

私は説明が下手だ。だから実践に移るぞ。

まずはその場で目を瞑ってみる」

自覚はあるのかよ。

とりあえず、シェワードの言う通りに目を瞑ろうとした。

が、その瞬間に急に不安になった。

ここで目を瞑ったら本当に死んでしまうのではないか。

ここで目を瞑ったら本当に戻れない場所に行ってしまうのではないか。

目を開けていようが瞑ろうが、何も見えていないのは変わらないのに。

それでもなかなか目を瞑れない。

僕は結局、今の状況から目を背けようとしていただけではないか？  
見極める、などと口だけだったのではないか？

そんな事を考えようとしていた時だった。

「まったく、馬鹿め。」

私の言う事が信じられない奴が私に付いて行くなどと言うな。  
旅は道連れ何とやら、と『表世界』では言うのだろう？

こうなったからにはやむを得ん。

しばらくは私がおまえを守ってやる。

私は強いぞ？ 多分おまえなんかでは『死んでも』私には勝てん。  
そもそもに、死んでいるのかどうかを自分で決めるために私に道  
案内をさせるのではなかったのか？

だから、さっさと目を瞑れ」

シエワードの二度目の苦笑い。

仕方ない奴め。暗にそう言っているようで。

「ありがとうございます」

クスツと無意識に笑ってしまった。

そうだった。自分で決めるために行くのに、自分がそれを渋った  
ら何も進まない。

そう思うと同時に目を瞑った。

まぶたは一瞬強張ったが、今度は抵抗しなかった。

「目を瞑ったら、まずはおまえがこの『裏世界』で一番最初に来た、  
何だか懐かしい風景だった場所を思い浮かべてみる」

シェワードが続ける。

え〜っと、懐かしい風景？

そんなものあつたっけ……

あ、あつたあつた。僕がこの空間に来る前に、何だか昔何処かで見た事のある風景の場所だ。

その記憶を頭の中の引き出しから探し当てる。

そして、僕は全神経をそちらに傾けた。だんだん思い出してきた……

「その場所を「裏世界のロビー」と呼ぶ。覚えておけ。

そのイメージを、一・二・三で強く念じてくれ。そうすれば、まず「裏世界のロビー」に行ける。

では、いくぞ」

「はい。大丈夫です」

多分、大丈夫だ。

返事をしてから、神経を尖らせて、頭の中の一点に気を集中させる。

「じゃあ、いくぞ。

一……二……三！」

その瞬間。

ぎゅっと右手に握った感触が、激しく揺らぎ始めた。

それをしっかりと逃がさないようにして。

僕の周りの空間が一点にぐわつと集中していく。  
空間を構成していた要素が全て吸い込まれていって。  
それが一点が盛り上がり、パツと弾けた。  
それが完全に弾け切った時、ようやく周りが止まった……

「……おい、もう目を開けていいぞ」

シェワードの声を合図に、その瞬間に目を開けて周りを見渡した。  
……ああ、この空間だ。僕が一番初めに来たのは。

やっぱり懐かしい感じがする。

それが何故なのかは、記憶がぼやけていて思い出せない。  
だけど、ここの風景は透き通っていた。巨大な絵だとしたら、描かれてあるキャンバスの後ろ側まで透けていそうな透明感。

「裏世界のロビー」は、広々としていた。上から光が燦々と注いでいて、見渡す限り、壁が見えない。

ロビーと言っても、椅子もカウンターも、何も無い。ただ広大な空間が静かに在るのみ。

「こつこついう空間、いいですね」

気づけば、独り言が漏れていた。

開放感あふれる空気を胸一杯に吸い込んでみて。

「私もここは好きだ。心が癒される感じがしてな。

……それはさておき、私にそんな事で気軽に話し掛けるなど言っただろう。まったく、おまえって奴は」

独り言のつもりだったんだけどな。

それにしてもシェワードの姿はこんな明るい所に出ても全く見え



ない。

『裏世界』では透明人間もありなのだろうか。

「おい、とにかく目的地に行くぞ！」

「ここは中継地。目的地は、「裏商店街」と呼ばれているところだ」

ん？ でも、僕は当然そんな場所のイメージなんて持っていません。でも、僕は当然そんな場所のイメージなんて持っていません。訳で。

「このイメージは、漠然としていたけれど覚えていたから良かった。でもイメージできないところにはワープできないんじゃないのか？」

「僕、どうやってワープすればいいんです？」

「そんな所、行った事も無いのにイメージできませんよ？」

「ふふ、抜かりは無い。」

「こういう時は、そのおまえに握らせてある『リードホルダー』を頭の中でしっかりと想像してくれ。」

「形や色、触り心地、漂う雰囲気。そのものを完全に頭の中で復元するような感じで、な？」

「私がお前を引っ張ってワープしてやる」

……ほう。そんな事も出来るのか。

「自分の右手を開いてみると、『リードホルダー』と呼ばれたそれは、木でできた素朴な取っ手だった。」

木の風合いがそのまま出ている、自然からの一品。

縄跳びの端に付いている持ち手みたいなそれには、細かく何種類もの幾何学模様がびっしりと刻まれていた。

ただ、その彫りが浅くてさっきまでは全然気付かなかったけど。

「これのどこにそんな凄い機能があるんだか。」

「とにかく、やってみるぞ。」

さっさと目を瞑らないと置いて行くからな！」

上から注いでいる光は、太陽の光、なのかな？

目を閉じた後、頭にそんな事が思い浮かぶ。

『裏世界』という言葉から閻魔大王の君臨している世界を頭の端に想像していた自分。

それがすぐくちっぽけに感じられた。

第9話：『裏世界』事始め（後書き）

ここまでが一区切り、です。

次からもう少し文章を小切りにして進めたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8237k/>

---

私の願いごと

2010年10月8日21時51分発行